レッド、ブラッド、サイド、サイト、アウト、ダウト、再度、サイド

今ダ　果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レッド、ブラッド、サイド、サイト、アウト、ダウト、再度、サイド

【Ｎコード】
Ｎ３９５４Ｚ

【作者名】
今ダ　果枯

【あらすじ】
少女と青年の暗い世界の短い会話。

ずるずると闇から抜け出す。
夢乃　琴はとあるバーの扉をくぐる。

私の入店したバーはバーと言うより喫茶店に近い印象を受ける店なのだが。店長が「ババァ」なので、バーなのだろう。冗談だ。
「お疲れぇ」
バイトに入ったばかりの大学生、喜多島　兄（けい）がねぎらいの言葉を掛けてくれる。こいつはいつも楽しそうな顔をしている。きっと脳味噌はツルツルで皺ひとつ無いに違いない。そうじゃないとこんなに幸せそうにできないだろう。
「レモネード」
「はいはぁい」
本当に幸せそうでムカつく。
「ババァ、呼んでくれない？」
こんな奴に相手されてたら、こっちの脳細胞が減りそうだ。
「クレハさんは今お出かけ中」
あのババァのことだ、どこかの政治家と年齢詐称してエロいことしてるに決まってる。脳内は常にピンク色のセクハラ痴女でも、腹の黒さは異常。実際、あのババァが動けばこの国の政治を揺るがすことぐらい余裕らしい。文字通り「傾国の美女」ってことらしい。
「はぁ、お前、なんか面白いことやれよ」
「無茶振り！」

さっさとしろよ。

「じゃ、じゃあ、この駄洒落には内容が無いよ～なんて言わせないよ～」
……
「そう言えば、お前なんか幸せそうだな」
「スルー！」
まぁ、こいつになにか求めた私が馬鹿だった。
「まぁ、ねぇ、いやぁ分かる！分かっちゃう！！」
ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ
「うぜぇ、話してみたら？」
「いやぁ、今日ね、片思いだった女の子に告白したらオッケーをもらったんだ。めちゃめちゃ可愛い子でね。ほのぼのしてて、こう守りたくなる、庇護欲を掻き立てられるって言うか……」
のろけうぜぇ。
「……ってところがちょーかわいいんだよねぇ、同い年なんだけどさぁ長瀬川　美香茂っていう子で……」
えっ！何と！
「ミカモ！お前、いい女に引っ掛かったな、そんな落ちがあるなんて、やるじゃない！」
なんだ、幸せなのろけかと思えば、蓋を開ければドッロドロのグチャグチャじゃないの。
「どっ、どういうこと？」
「いやぁ、だってお前、ミカモの七人目の彼氏だよ？」
うわぁ、幸せな顔にひびが入る、口をパクパクさせて酸欠の金魚みたいだ。あぁ、人の不幸は蜜の味やらなんやらってねぇ。
「……マ、マジ？」
「マジるんるん、ちなみに彼女も六人」
「へ、彼女？」
へなへなと地面に座り込む。

「あいつ、同性もいけるのりだよ」
意☆気☆消☆沈。
信じられない、見たいな顔をしてる。
「まぁ、元気出しなよ」
「いや、だって、でもよぉ」
「十三人の中でお前が一番になればいいじゃないの」
ぱちぱちまばたきの回数が増える、口もパクパクさせて、まぁ、間抜けだ。
恥ずかしそうにそっぽを向く。

「十四歳に慰められるなんて」
「十九歳かっこ笑い、しかも、かっこ悪い。」
「うるさいやい」
涙目になってる、きゃわいいぃ。
「そんなんじゃあ一流のバーテンダーへの道はまだまだだね」
「うるせぇ、て言うかもっと慰めろやい」
「うわぁ、十四歳の幼女に何求めてんの気持ち悪いわぁ」
どんどんへこむ。まぁ、面白いけど。

ふぅ。
「さて、他の客もいなくなったし本題に入ろうか」
「え、今まで結構マジな話だったんだけど」

「違う、ビッチババァからなんか聞いてない？」
「クレハさんから？……あぁ！そうだ預かりものがあった」
店の奥から茶色の封筒を持ってくる。
封筒の口から中をぱらぱらと簡単に覗く。
「聞いても問題ないなら聞きたいんだが、クレハさんとお前ってどういう関係なの？」
恐る恐る、しかし堂々たずねくる態度がある程度場慣れしているのを感じさせた
「へぇ、興味ある？」
悪戯っぽく笑ってみせる。
「だって、クレハさんってあれじゃん、政治家とかと繋がりがあって……この国の闇、、みたいな物の中心人物みたいな人だろ」
「あぁうん」
「その人がお前みたいな十四歳の、まぁ中学生の少女と対等に話し合ってるってのはちょっとなぁ、変って言うか、シュールって言うか、違和感あるじゃん」
「訂正しとくけど、私、中学生じゃないからな」
「へ？十四歳だろ、不登校ってこと」
「違う、小学校中退が最終学歴」
「　　」
「口を開けたままにしてると馬鹿に見えるぞ」
「いやいや、小学校中退って絶滅危惧種だろ！」
こいつの驚いた反応は単調だ、まばたき増えるか、口をパクパクするか、その両方かの三択。
「ここで働いてるってことはお前だって訳ありだろ？」
「いや、まぁ、そうだけど」
男らしくねぇ反応。
「話せよ」
「いや、嫌だよ！」
ふーん、反抗的。まぁ、こいつの身の上話なんて興味ないけど。

「ほれ」
バサッ。
茶封筒をテーブルの上に投げる。
「見たけりゃ見ろよ」
「いや、いいのか？」
不安気にたずねてくる。
「さぁ？」
肩をすくめて笑ってみせる。微量の狂気を内に包んで。
ゴクリとつばをのむ、もちろん喜多島　兄が。

ばっさりと封筒の中身を広げる。

「なっ、なんだこれ」

「赤野　霧子、三十二歳、花屋、元総理大臣、岸　龍二と愛人関係にあり。現国防長官の浅木　正太とも親密な関係あるが、……
……なんだよこれ、ストーカー？じゃないよな、流石に」

「誰がこんな腐れババァの個人情報なんて知りたいんだよ！はぁあ、殺しの依頼だよ」
「殺し！！」
「あ～あ、残念、もう後戻りはできないぞぉ。兄（けい）くん」
「えっ！？」
喜多島　兄の顔がだんだん青ざめていく。
「いやぁ、あのババァも大層喜ぶと思うぞぉ、こんな身近に協力（パシリ）者が出来て」
「いやいやいや、俺は何も見てない見てないぞ、うん、何も見てない」
現実逃避だって。うざっ。

サクッ、とな。

「がぁっぁあぁ、うぐぅぅぅぅぅう」

二の腕を刺した。

「叫ばないんだ、お利口さん」

腕を押さえてうずくまる喜多島　兄の頭を撫でる。

「ちくしょう……」

「そう睨むなよ、惚れちゃうぜ」

「いきなり刺すなよ、早すぎてナイフ出すのも見えなかった、つか、刺さってちょっとするまで気付かなかった」

ほぉ、刺されてその反応か。マゾなのか？刺され慣れてるとか？

「まぁ、私、現実逃避って言う反応が嫌いなのよねぇ、今度から気を付けてね」

「……アイアイさー」

一気に元気無くなったなぁ。

「それにしたって、お前、十四歳だろ、なんで殺し屋なんて……」

「別にそれしか道が無かった訳じゃないぜ！」

「いやいや、それなら寧ろなおさら何で？」

「別に話す必要は無いぜ！」

「納得いかん」みたいな顔されてもねぇ。ロリコンか？

「そもそも、お前だって自分の事情、話さないんでしょ」

「いや、まぁ、そうだけど」

「そうだけど……なに？」

「いや流石に自分より小さい子にこんな世界は厳しすぎるだろ！」

「それは、お前の勝手な価値観の押し付けだよ」

目を細めて微笑んでみせる。

「辛くなのか？」

「馬鹿言え、エンジョイしまくりだよ」

「お前、俺なんかよりずっと大人だな」

「はは、馬鹿言え、お前、来年成人だろ？」
「いやそうだけど、文脈的にカンケー無いし」
ぬるくなったレモネードを一気に飲み干す。
「それじゃあな」
そろそろミカモを可愛がってあげないといけないなぁ。

夢乃　琴はとあるバーの扉をくぐる。
またずるずると闇の中を這い回るために。

（後書き）

暗めの話を書こうと思ったのですが私には向かなかったようです。多分。

感想などをいただけたら、それはもはや僥倖。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3954z/

レッド、ブラッド、サイド、サイト、アウト、ダウト、再度、サイド

2011年12月16日23時50分発行